

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可  
平成十七年四月一日発行  
通巻九六八号 毎月一回 一日発行

# 京鹿子



4月号

— 近 詠 —

# 佐保姫 丸山佳子

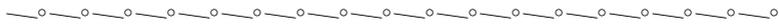
風 呂 敷 に 包 み き れ な い 春 が 立 ち

立 春 の 地 球 を 汚 す 犬 う ろ う ろ

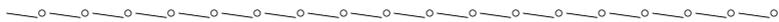
今 と い う 刻 は 今 し か 風 花 も

残 り 雪 と 冷 笑 交 し さ や う な ら





佐保姫とゆび切り二度め館の角<sup>すみ</sup>  
地虫出づ頬に光陰矢の日ざし  
道祖神の背をみて育ちゆく土筆  
少年の影は男よ青きふむ  
神ながら巫女のごとしよ緋鯉の列  
花はまだ今日は矢印失礼する



清響集  
その四十八

豊田都峰



影の濃き山狼もまた影に  
残雪の峠を越えん晴れ男  
雪しろや麓の村のあれこれと  
芽吹きそむ山は幾重の国にして  
心また越ゆるものなり遍路笠  
竜の玉転げば空へ落ちゆかん

竜の玉色凝りそめしは神の代か  
竜の玉女城主の自刃の地  
雲ひとつうすひかりして冴えかへる  
冴えかへる城郭多面に切りたてて  
深入りす雨水のころの野となれば  
風花や比叡より愛宕つなぎけり  
城は今芽吹の陣の旗印  
葉牡丹のひぐれもあたりふくらます

## 秀華採集

鶴に鶴空の広さを連れてくる

直江裕子

次々と鶴が渡ってくる。その風景を「空の広さを連れてくる」と転換してしま  
う感覚はすばらしい。一段と鶴が白く輝きもする。

抽斗に和紙のつかへて雪となる

佐久間多佳子

寒夕焼紛れぬやうに病夫を守る

城石美津子

前句、この感覚的な作品はよくあるが「和紙」をもってきたことを手柄とした  
い。和紙の持つ質感と雪とが微妙に響いている。

後句、寒夕焼の暗色を思う時、的確な季語と評価したい。

鈴鹿 仁

持時間

ゆるむ歩に春の木となる持時間  
春は遅々石垣ゆるぎなき古城  
落椿喪ごころとなる作務箒  
啓蟄や恬淡の雲流さずに  
かぎろひはひらがなのごと野に遊ぶ  
椿落つ不惑といふも燃ゆいろに  
紅椿萬のはじめの一鳥居

近 詠

宇都宮滴水

鍵の穴

雪解野銃音ゆきて戻らざり  
探梅や方向音痴の足を曳く  
啓蟄や不思議に暗い鍵の穴  
あとずさる風一尺の盆梅に  
春光や十字架クルスの影の直線に  
おぼろ闇魔法使ひの杖さがす  
入学つ子気負ふ一步の余熱かな

神麓集



鳥羽絵とて絞りの織や初霞  
鳥獸戯画兎がシテの絵巻にて  
鳥獸の戯るなかま冬蛙  
辻が花技法で猿や兎など  
戯れる兎のすがた帶着物

谷中七福神

北村 香朗

人日や田端はむかし文土村  
小唄教うる小路を抜けて福詣  
布袋尊に空似と言はる福詣  
寒晴や区画ゆつたり谷中墓地  
枯蓮や詣で納めの弁財天

薬 壺

丸山 冬鳳

酸素マスクはづせば去啖咳を切り  
見舞花入れ替へ挿しかへ秋の薔薇  
マスコツト雪のわんわんぬいぐるみ  
酸素管つなぐボンベは春隣り  
おんころころ薬壺の他力予後自力

荻芽ぐむ  
藤岡 紫水  
天網の疎を見逃さず揚る凧  
貫録といふほかはなし飾り白  
杉の秀に灯る極星雪催ひ  
一切の色捨て無心勇み独樂  
水際のからさ遠ざけ荻芽ぐむ

山田 耕子

年末の別離の會釋ねんごろに  
大根抜き師走の土産一抱え  
掘りたての小芋を袋に渡さる  
病み上りの顔をほころび年の暮れ  
年末の拜觀券添へ手紙來し

吉田 多美

書く文字のやさしくなりし水仙忌  
齒に合はぬ福豆身ぬちに鬼棲ませ  
寒月の裏に亡母居て燭ゆらす  
梅三分まさかと思ふ訃報來て  
書く文の少しかすれし雪もよひ

# 神麓集



鳥獸に飢餓の迫りし寒密寺  
 奈落てふ地獄極樂瀧凍つる  
 石棺に男女がありて春近し  
 神宿る一樹の洞の闇冷ゆる  
 盗掘の穴ぼつかりと棺凍つる

角直指

干鱧期 彌寝 瓶史

藪入りと異口同音に医婦わらふ  
 カロリーのグラム療法干鱧期  
 療窓に粉雪のもゆらちりちりと  
 尊位に未だ近付けず豆撒かる  
 狂ほしく夜毎恋猫呼びに来る

幾星霜舞ふことも無き飾独楽  
 古なじみ集ひて「一茶かるた」取る  
 冬草のきはだつ青き草城忌  
 味うすき羊羹食べてるやうな冬  
 豆炒つて冬の出口も見えて来し

丹生をだまき

隣家に娘が越し来鍵ふゆ去年今年  
 捨てがたき娘の不用品積み年迎ふ  
 娘夫婦と雑煮を祝ひ夫ご機嫌  
 日に幾度か娘が顔を見す松の内  
 隣の娘を呼び寄せ昼餉冬ぬくし

山田をがたま

船越 美喜

新春や重ねし句座は五百回  
 戸を繰れば一氣に翔ちし初雀  
 冬すみれ一步を譲る心がけ  
 初鶏やかかつて農家でありし家に  
 やすらけくいつもの窓に初比叡

枯山を吸ひ込むでゐる道路鏡  
 神鏡を出たり入つたり雪女郎  
 掛け値なき齡を鏡に春隣り  
 隠岐はるか立春さむき増鏡  
 雲は春なにも写さぬ懷中鏡

伊藤 希眸



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

大鷹の視界にひとり群れもせず  
振袖を刻んでキルトの一片に  
人体のまだやはらかく雪が降る  
足腰をきたへて見上ぐ冬桜  
鶴に鶴空の広さを連れてくる  
篋に風のひそめる年の暮  
車座のひとりひとりにある師走  
数へ日の暮れゆく水の行方かな  
寒旱洗ひざらしの丹波布  
抽斗に和紙のつかへて雪となる  
いのち美し声よく鳴いて初鴉

千葉 直江 裕子

久世 佐久間多佳子

東京 城石美津子

皎と鳴く鶴の一声明日へむけ  
日へ移せば夜は如何ならむいぼむしり  
寄せ鍋に賑ふ座敷夫快き日  
寒夕焼粉れぬやうに病夫を守る  
寒牡丹千姫髪をととのへよ  
黄梅の辺りの明るさこそ熟女  
河豚がささやく毒消しを買はむかね  
牡蛎を焼くすんなり入る古代國  
山一つ越ゆる灯となれ雪女  
まなうらに海のきらめき鏡餅  
舞ひおりし三日の紅葉しをりとす

千葉 伊藤 希眸

東京 田村みどり